



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2024.9.25 号

夏見台幼稚園・保育園でのこ
わりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ(info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

『子どもと悪』をぜひお手元にどうぞ！

「よい子」の条件



みなさんにとって「よ
い子」の条件とはどのよ
うなものでしょうか？
言う事をよく聞く、素直、
口ごたえしないなど。学
校における「よい子」も

そんな感じでしょうか。でも本当にそれでいい
のかと疑問を投げかける本をご紹介します。



『子どもと悪』(河合隼雄著、
岩波現代文庫)。20 年以上前
の本ですが、この本はぜひ購
入いただきご一読いただけれ
ばと思います。小さな子ども
はやがて思春期を迎え、自立
していきます。その過程で起

こるいくつかの問題を取り上げています。

こんな一節があります。「**教師や親が悪を排除
することによってよい子をつくろうと焦ると、結局は
大きい悪を招き寄せることになってしまう**」。もちろ
ん「よい子」であるに越したことはありません。
しかし善悪は相対的なもので、片方を消し去る
ことはできません。ならば「悪」とどう向き合
うか、それを検討する本です。

故河合隼雄さんはユング心理学者なので、ユ
ングの「シャドウ (影)」についての考えが一貫
したテーマとなっています。氷山の図をご覧ください。水面上の「意識」と水面下の「無意識」、
そこに「善 (光)」と「悪 (影)」とあります。
光が強ければ強いほど、影は濃くなります。よ



ランスされるものです。

氷山の中心、すなわち意識と無意識を統合し
た中心に★がありますが、これが「自己」です
(意識の中心は「自我」)。両社の統合を「自己
実現」とユングはいいました。それが人生の目
標であると。

本の最初はい
きなり「悪と創
造」。刺激的で
す。創造とは既存の
ものを壊して生
まれます。人間は

現状維持を好みます。それは「善」です。しか
し創造する人は現状に満足できません。「悪」の
レッテルを貼られがちとなります。

もちろん河合さんは悪を全面肯定していま
せん。しかし悪にはパワーがあります。そのパワ
ーをうまく取り込むことが大切です。

子どもはやがて親から離れます。現状の親子
関係の破壊が自立です。すべて悪には自立にか
かわるところがあるのです。

例えば「盗み」。「**子どもの場合は成長するた
めには何かを「とる」必要がある(食べ物含め)。子
どもが盗むのは何か必要不可欠のものを得ようとして
いるのではないか？**」

母親から厳しく
しつけられてきた
小2女子。しかし文
房具店から定期的
に万引きしていた
ことがバレます。親

は激怒。「お母さんは知らない！自分で何とかし
なさい！」と突き放しますが、ふと自分の子ど
も時代を思い出します。お母さんに甘えたかつ



目次

1. 悪と創造
2. 悪とは何か
3. 盗み
4. 暴力と攻撃性
5. うそ・秘密・性
6. いじめ
7. 子どもをとりまく悪



たのに「お姉ちゃんなんだからね」と拒否。目の前で泣いている自分の子どもの姿にシンクロします。

「盗みまでして本当に欲しかったものは何か？」
「子どもは自分に欠けているもの、必要なものを盗んででも得ようとする」と河合さんは書いています。

続いて「暴力と攻撃性」。個性を伸ばそう、といわれますが、個性とはアグレッシブ（攻撃的）な面を含みます。アメリカでは好ましいものと受け止められますが、日本でアグレッシブというネガティブなイメージがあります。攻撃性は内に隠されます。しかし受験での競争は奨励されます。

「受験における競争は1つの枠の中で序列をつけるもの。個性の競争ではない。むしろ本来の個性を抑えないといけない」。日本で個性的であることはなかなか難しいものです。

子どもの持つ「攻撃性」を、遊びを通してうまく昇華できれば、それは「性格」として統合されます。それは勇気というエネルギーになりうるのです。



続いて「うそ・秘密」。

「親からの自立のためには幼児期の一心同体的なつながりを壊す必要がある。そこに秘密の意義がある」。しかし子どもの内的世界を

尊重できず、何でもかんでも知りたがる親は、それは子どもへの不信感ではなく、自分自身への不安が原因ではないか、と河合さんは書いています。



これはこの本に一貫したテーマですが、親自身のアイデンティティが問われてきます。親が光とすると子どもは影となります。両方で一つの関係です。子どもの悪とは、自分自身の悪との問題でもあるのです。

最後に「いじめ」。「いじめは「悪」と大人は言う。しかしそれをチクるのは子ども社会では「悪」になる。この2つの「悪」のはざままで苦しむ」。

こうした状態の子どもには、まず相談者が必要です。しかしスクールカウンセラーの次のような言葉があります。「聞いてくれるだけでいいのに(教師にいうと)すぐ「対策」を立てようとするから相談できない」。



ここでいう「対策」についてですが、この本には「〇〇しなさい」といったハウツーや対策は書かれていません。むしろ、「対策とは」という項目もあり、「対策を盾に人間としての責任から逃れるなら、対策などない方がいい」とまで書かれています。

つまり、子どもの「悪」に対峙する覚悟、自分の人生を賭けて子どもに向き合う覚悟を説く本です。

DoではなくBeが大事 (やり方) (あり方)

ミスター・チルドレンの曲に、「わが子が将来被害者にあるいは加害者になった時…」といったテーマの曲がありました。涙を流し愛すること以外にないと歌詞にはありましたが、この本にはさまざまなヒントがありますので、ぜひ購入してご一読ください。(終)